命の尊さ

古堅中学校　2年5組　宮城　佑衣加

太平洋戦争終結から日本は戦後71年を迎えました。71年という年月が流れ、現代の人々は、沖縄戦という悲惨な出来事が記憶の中からどんどん薄れてきています。

この戦争では、沖縄だけが唯一の地上戦でした。この沖縄戦だけでの死者数はアメリカ兵も含め約20万人だと言われています。私の祖母は戦争体験者でいつも「命は尊い」と口癖のように言っています。昔、戦争体験者へのインタビューという宿題があり、私は祖母に尋ねてみると、祖母は黙り込んでしまいました。その頃、幼かった私でも祖母が自分を追い詰めるような様子を感じ、どれだけつらい思いをしたのかがとても伝わってきました。

死という言葉は、私の周りでは軽い言葉として「お前死ね」などを聞いたことが数えきれないほどありますが、本当はとても重い言葉です。先ほど言った沖縄戦での死者数が20

万人で、ここ読谷村の現在の人口の約4倍となります。すると、この方々の死で悲しみ苦しんだ人は何人になるでしょうか。

私の学校では、慰霊の日の前日、6月22日に平和集会が行われました。平和集会では劇で戦時中にガマの中にいる母親の役を演じました。この役では、大事な娘に「アメリカ兵に殺されるよりか、母ちゃんの手で殺して下さい」と言われます。そして、母親はためらいながらも首を締めて殺してしまいます。

その事を悔やんだ母親はこう語ります。

「私は家族を殺した。子供も、親もこの手で。大事な大事な家族を私は殺してしまった。それが日本国民として取るべき行動だと教えられた。でも、分からない。どうして、愛する人を殺すことがお国のためなのか。どうして私だけが生きているのか。私も死にたい。」

この言葉から、71年前の人々の本音が全て伝わってきました。そして私がこの時代に生

まれてきたとしたらどうしたのかなと疑問に思いました。死というものは、命を捨てるということ。一生大切な人に会えないということ。だから誰にでも死に対する恐怖心があると思います。しかし、戦時中の人々は生きるということも恐怖だったと思います。大切な人が目の前で亡くなるということ、敵に殺されるかもしれないということ。戦争体験は私の祖母のように、戦争という悲惨な出来事で一生の傷を負った人々が、まだ、たくさんいます。

そんな中、今の世の中は平和なのでしょうか。先日、学校内で平和アンケートがありました。今の世の中は平和か平和じゃないかの2つの選択肢で私は悩みながらも、平和と答えました。なぜかというと、単純に71年前と比べて平和だと感じたからです。

しかし、これからの未来、今よりも平和になるか、戦争がおこるかは誰にも分かりません。でも、確実に戦争という出来事にまた近

づいているのは確かだと思っています。

これから先、未来を受け継ぐのは私たちです。私は、この作文を書くことによって、まさらに、「もう二度とこんなことは起きないようにしたい！」と思いました。私一人の力は小さいですが、皆で力を合わせれば強い力です。そのカで、この悲惨すぎた出来事を私たちは私たちなりに確実に未来に語り継ぎ「平和」を守っていけるよう、これからも行動したいです。